

ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンの 「キリスト教における宗教性」発達モデルの構成

松島公望¹⁾ 宮下一博²⁾

¹⁾東京大学大学院総合文化研究科 ²⁾千葉大学・教育学部

Construction of the Developmental Model of Christian Religiosity for Japanese Christian of Holiness Church

MATSUSHIMA Kobo¹⁾ MIYASHITA Kazuhiro²⁾

¹⁾Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo, Japan

²⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究では、ライフヒストリー法を用いて、ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンの「キリスト教における宗教性 (Glock, 1962; Verbit, 1970による)」発達モデルを構成した。まず7人の神学生に面接調査を行った。その面接調査で得られた資料を基に個人史を作成した。続けて、作道 (1983, 1984 a, 1984 b, 1986) による「キリスト教における宗教性」発達モデルを基にして、その個人史から7人の「キリスト教における宗教性」発達プロセスを構成した。7人の「キリスト教における宗教性」発達プロセスから各局面ごとに共通項を集約し、最終的にホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達モデルを構成した。さらに、サンプリングの問題、「宗教性」発達モデルの信頼性、妥当性について検討した。その結果、モデルの信頼性、妥当性については概ね高いことが示されたが、サンプリングについては全ての要件が満たされているとはいえなかった。

The purpose of this study was to construct the developmental model of “Christian religiosity (by Glock, 1962; Verbit, 1970)” for Japanese Christian of Holiness church by life history method. First, 7 seminarians were interviewed, and their life histories were made by the interviewed data. Second, based on the developmental model of Christian religiosity by Sakumichi (1983, 1984a, 1984b, 1986), the developmental process of Christian religiosity of 7 seminarians were constructed through their life histories. Third, the common case was summarized for each phase in the developmental process of Christian religiosity of 7 seminarians. Finally, the developmental model of Christian religiosity for Japanese Christian of Holiness church was constructed. In addition, its sampling, reliability, and validity were examined. The results showed that the model had high reliability and validity in general, but its sampling did not fulfill all conditions.

キーワード：「キリスト教における宗教性」発達モデル (the developmental model of Christian religiosity)

ホーリネス系教会に関わるクリスチャン (Japanese Christian of Holiness church) 信頼性 (reliability)
妥当性 (validity) サンプリング (sampling)

問題と目的

宗教心理学的研究では、宗教性とは、人間のなかにある宗教への関与・傾倒の程度を示す概念であり、世界の諸宗教では、宗教性の表出は多大な相違と多様性がみられるにもかかわらず、ある普遍的な領域において宗教性の表出の仕方にかかなりの一致がみられるとしている (金児, 1997)。

宗教性のなかで、「キリスト教における宗教性」(以下、単に「宗教性」と記す) は、次のように定義される (松島, 2006, 2007)。すなわち、「宗教性」とは、「個人がどの程度キリスト教に関与しているのか」を測定する指標であり、個人がキリスト教についてどの程度、「信じるのか、感じるのか (宗教意識)」、「振る舞うのか (宗

教行動)」を表す。すなわち、宗教意識とは、信念や知識に関わる「認知的成分 (信じる)」と情緒的な体験に関わる「感情的成分 (感じる)」を含む概念であり、「行動的成分 (振る舞う)」は宗教行動に相当する。つまり、宗教意識と宗教行動を包括する枠組が「宗教性」といえる (Cornwall, Albrecht, Cunningham, & Pitcher, 1986)。

「宗教性」に関する研究では、Glock (1962) が提示した「信念、知識、体験、行動、効果」の5次元が重要な指標とされており、多くの研究者によって引用されている (Hill & Hood, 1999; 杉山, 2004)。「信念」とは宗教的な教えを信じること、「知識」とは教義、教典に関する情報を有すること、「体験」とは回心体験などを含み、宗教的経験や宗教的感情を持つこと、「行動」とは礼拝、祈りなどといった特定の宗教的行動である。また、「効果」とは以上の4つの次元が信者の生活や行動、精神などに及ぼす (クリスチャンになることによって受ける)

連絡先著者：松島公望

社会的、世俗的な影響を意味する。「効果」はさらに「報酬」と「責任」に分けられる。「報酬」とは個人における心の平安、悩みからの解放、幸福感などを指し、「責任」とは倫理的禁止の受容や、宗教集団における責務を全うすることを指す。

ただし、調査を実施する際には、調査研究の目的に応じて各次元を柔軟に取捨選択したり、次元を新たに付け加えたりしても良いとGlock自身が述べている (Glock & Stark, 1965, 1966)。今田 (1955) は、個人の「宗教性」の発達には、宗教集団を始めとする宗教的環境から大きな影響を受けると述べている。Verbit (1970) は、宗教の共同体としての側面に注目し、宗教的な組織への参加・貢献の度合、そこに友人や仲間が含まれる基準や程度などを問うものとして、「共同体」次元を提唱した。「共同体」とは、信仰を介した対人的・情緒的な関わりを指し、集団への帰属感や社会化の促進に関連する。また、「共同体」は、宗教意識に位置づけられ、「体験」と同様に感情成分に含まれる。日本においても、西山 (1976)、杉山 (2004) が宗教集団における共同体の側面について注目し、その重要性を指摘している。日本のキリスト教においても、クリスチャンとの関係が個人の「宗教性」に影響を与えることが想定されることから、本研究ではVerbit (1970) の「共同体」の次元をGlock (1962) の5次元に追加して検討する。

「宗教性」発達に関する実証的な研究は、主として欧米を中心に進められており (西脇, 2005)、この半世紀、数多くの著作や概説書も出版されている (Spilka, Hood, Hunsberger, Gorsuch, 2003)。しかし日本では、宗教性発達を実証的に検討した研究はほとんど行われていない (神保, 1980; 杉山, 2004; 西脇, 2005)。その理由として、日本人の宗教性発達に関する心理学的研究の難しさが挙げられる (神保, 1980)。日本の宗教的風土は複雑であり、信仰の表明の仕方も異なっているため、日本人一般の宗教を特定することは困難である。また、学校や家庭の調査協力を得ることが困難な場合も多く、信仰の対象を特定できない場合もある。これらの問題点を考慮すると、日本において実証的に宗教性発達を検討する際にも、できる限り教団、教派を特定する必要がある。特定の宗教を信じる信者を対象にすることにより、「宗教性」発達を詳細に検討することができる。まず1つの教団、教派の「宗教性」発達を明らかにすることができれば、この研究成果を基に、他の教団、教派と比較することも可能となり、日本人の宗教性発達を検討するための礎を作ることができる。

そこで本研究では、プロテスタント・キリスト教 (以下、キリスト教と記す¹⁾) を取り上げ、そのなかでもキリスト教の教派の1つであるホーリネス系教会を対象とする。ホーリネス系教会を対象とする理由として、ホーリネス系教会は、「聖なる神によって聖なる者とされること (回心体験)」を強調することに特色がある。そのため、ホーリネス系教会は、他の教派に比べて個人の情緒的かつ自覚的な回心体験を重視する土壤があり、その信者は個人の信仰を自覚的に意識する傾向が強く、宗教意識を顕在的に捉えやすいと考えられるからである。加えて、筆者は、両親ともにクリスチャンであり、ホーリ

ネス系教会に属するクリスチャン家庭に育った。兄は、現在、ホーリネス系教会の牧師をしている。また、筆者自身もホーリネス系教会の神学校に通っていたことがある。筆者のこのような経験から、ホーリネス系教会に関わるクリスチャンの生育歴や宗教体験、考え方などを理解しやすく、ホーリネス系教会に関わる人々との信頼関係を築きやすいことも挙げられる。

それでは、ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達を検討し、「宗教性」発達モデルを新たに構成するためにはどのような研究法が有効であるだろうか。個々人の「宗教性」発達を探索的に分析し、その分析過程から「宗教性」発達モデルを構成するための有効な研究法としてライフヒストリー法が挙げられる。ライフヒストリーとは、「ある個人が時間的経過を踏まえ、自らの経験や社会に関して解釈した記録」 (川又, 2002) と定義される。ライフヒストリー法とは、その記録を構成するための方法を指し、その記録は、自伝・伝記・日記・手紙・手記・メモなどの「文献資料」と面接調査から語りを文字化した「口述資料」とに大別される²⁾ (川又・寺田・武井, 2006)。

ライフヒストリー法は、質的研究法の一つであり、社会学を始め、歴史学、人類学、民俗学、近年では心理学や政治学などの分野で様々な成果を上げてきているといわれている (川又・寺田・武井, 2006)。

難波 (2000) は、他人には見えにくい私的領域の意味、構造、問題を探求し、その人の内的発達のプロセスを明らかにしようとする時、ライフヒストリー法が最も有効な方法であると述べている。また、谷 (1996) は、ライフヒストリー法がもつ3つの特性として、①時間的パースペクティブを内蔵しているため、対象をプロセスとして把握することが可能である、②全体関連的な対象把握を志向する、③主観的現実深く入り込み、内面からの意味把握が可能であることを挙げ、特に①の特性がライフヒストリーの最大の強みであると述べている。信仰あるいは入信プロセスといったきわめて主観的な意味の領域 (個人の私的・内的世界) を扱う宗教研究では、ライフヒストリー法は非常に有効であるといえる³⁾ (川又・寺田・武井, 2006)。

本研究で扱う「宗教性」発達も、信仰や入信プロセスに深く関与している概念であり、主観的な意味の領域 (個人の私的・内的世界) を扱ったものである。このことから、日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達プロセスを捉えるためには、ライフヒストリー法は有効であると思われる。

さらに、ライフヒストリー法は、「仮説索出」および「類型構成」において非常に有効であるとされている (谷, 1996)。「仮説索出」とは、仮説生成までの分析過程を指す。また、「類型構成」とは、複数の要因の類型化を指す。さらに類型構成によって、「現象の総合的把握が可能になること」と「質的調査と量的調査との橋渡しとなること」が挙げられ、類型構成の意義が指摘されている (谷, 1996)。

谷 (1996) が示した「仮説索出」および「類型構成」とは、ライフヒストリー法のみならず質的研究全般で示されているものである。質的研究では、研究者があらか

じめもっている仮説を基に調査・分析を行って仮説を抽出するため、「仮説（理論）生成型研究」とも呼ばれている（瀬島・杉澤・大滝・前沢，2001）。

澤田・南（2001）は、「質的分析の核心にあるのは、多様な事象のなかから意味のある違いと類似のパターンを見出し、その本質的な特徴を同定することである。これは広い意味での概念化の作業であり、具体的には新しく見出された事象の集合に対して名づけを行うこと、すなわちカテゴリーを作り出すことを含んでいる。さらに、いくつかのカテゴリーを束ねる概念を構成し、概念間の関係を理論的に説明づける仮説の構成に至る場合もある」と説明し、質的研究は概念・仮説を構成するのに適していることを示唆している。また、山田（1986）は、複数の要因を包括的に捉えたモデル構成を行うための質的研究の有効性を指摘している。

本研究においても、ライフヒストリー法を用いることにより、日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達プロセスを検討し、それを基にして、「宗教性」発達モデルの構成を行う。すなわち、面接調査を行うことによって、個々人のデータ（口述資料）を収集し（その際、信仰体験談の文献資料も活用する）、そのデータから見出された「宗教性」発達に関わる事象を分類し、その結果を集約した上で、ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達モデルを構成するものである。

宗教を研究対象としたライフヒストリー研究の多くが、社会学（宗教社会学）的なアプローチで展開されているが、心理学的なアプローチからの研究としては、作道（1983, 1984 a, 1984 b, 1986）の研究が挙げられる。作道（1983, 1984 a, 1984 b, 1986）は、宮城県にあるS教会の牧師および信者を研究対象として、回心体験と入信過程との関連から宗教的社会化について検討した。

作道（1983, 1984 a, 1984 b, 1986）は、Berger & Luckmann（1967）の所説に基づき、宗教的社会化を宗教集団における再社会化過程と位置づけ、回心体験を単

に宗教体験を指すものとするのではなく、宗教集団における社会化の問題として捉えることとした。宗教的社会化の定義は『個人が宗教集団において共有されている現実定義を内在化し、その定義を自我の中心領域に定着させ、それを代表し表現する存在となる過程』である。この定義のなかで、現実定義とは『宗教集団において各構成員に共有されている宗教集団のなかでの現実（人間の罪の問題など）への見方』を表している。作道（1983, 1984 a, 1984 b, 1986）の宗教的社会化は、「キリスト教との接触過程」、「宗教集団（教会）への定着過程」を分類するなど、日本人クリスチャンにおける回心体験および入信プロセスを検討するものであり、本研究が想定する日本人クリスチャンの「宗教性」発達と重なる部分が多い。

そこで本研究では、まず作道（1983, 1984 a, 1984 b, 1986）の宗教的社会化の定義に基づき、「宗教性」発達モデルを構成する。構成した作道の「宗教性」発達モデルを基にして、各事例について「宗教性」発達プロセスを構成する。各事例について「宗教性」発達プロセスを構成した後、各局面ごとに分析・整理を行い、その結果に基づきホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンの「宗教性」発達モデルの構成をする。

以上のことから、本研究では、ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達モデルを構成することを目的とする。

方法

1. 調査対象者

Z神学校の神学生男性4名・女性3名。男性は4年生1名・3年生1名・2年生1名・1年生1名であり、女性は3年生3名である。各対象者のプロフィールをTable 1に示す。

男性の選定については、神学校の寮の舎監の教師と相談した上で、様々な経歴の神学生をお願いした。できる

Table 1 被面接者のプロフィール

対象者	性別	年齢	学年【コース】	クリスチャン家庭
事例A	女性	第1回面接時 30歳	3年生 [M.Div.コース]	非クリスチャン家庭
事例B	女性	第1回面接時 31歳	3年生 [M.Div.コース]	クリスチャン家庭
事例C	女性	第1回面接時 35歳	3年生 [M.Div.コース]	非クリスチャン家庭
事例D	男性	第1回面接時 25歳	2年生 [M.Div.コース]	クリスチャン家庭
事例E	男性	第1回面接時 32歳	3年生 [Th.B.コース]	非クリスチャン家庭
事例F	男性	第1回面接時 52歳	1年生 [Th.B.コース]	クリスチャン家庭
事例G	男性	第1回面接時 29歳	4年生 [Th.B.コース]	非クリスチャン家庭

注. Z神学校には、牧師養成課程Ⅰ、Ⅱと信徒伝道者養成課程の3つの課程がある。その分類は以下の通りである。①牧師養成課程Ⅰ（M. Div. コース）：修業年限3年。原則として4年制大学卒業者対象。短期大学卒業者および専門学校卒業者は、取得した専攻科目の単位によっては、牧師養成課程Ⅰに入学が許可される場合がある。②牧師養成課程Ⅱ（Th. B. コース）：修業年限4年。原則として高等学校卒業者対象。短期大学卒業者および専門学校卒業者で牧師養成課程Ⅰに該当しない者も対象。③信徒伝道者養成課程：修業年限1年。高等学校卒業以上の者。この課程を卒業した者で、改めて牧師として学びを続けていきたい者は、牧師養成課程2年次に編入することができる。

限り多様性をもった対象者を選定するために、舎監の教師と相談した際の選定基準は次の通りである。①クリスチャン家庭の出身であるか、非クリスチャン家庭の出身であるか、②クリスチャン家庭のなかでも、牧師家庭の出身であるか、信徒家庭の出身であるか、③当初からホーリネス系教会の出身であるか、他の教会出身で後にホーリネス系教会に関わるようになったか、④学歴は、高校卒業であるか、大学卒業であるか。さらに社会人を経て神学校に入学しているのか、⑤面接調査時の年齢が、青年期に相当しているのか、成人期に相当しているのか、である。

しかし、女性については、神学校は修養の場であり、男女の交際について制限されており、また筆者が外部の人間（男性）であることもあり、舎監の教師に選定をお任せした。

2. 手続き

面接は、1999年5～6月、9月、2000年2～3月、9～11月、2001年3～5月、の計5回行われた。一対一の半構造化面接によって行われ、所要時間は、20～75分であった。面接内容は全て被面接者の承諾を得てテープレコーダーに記録し、録音された記録に基づき逐語録を作成した。

(1)質問内容

5回とも、まず最初に「普段の生活のなかでの自らの信仰に関わるエピソード」について尋ね、そこから自由に信仰に関連する事柄について語ってもらった。

第1回目は、今までの神学校生活を振り返って、特に印象的に感じた事柄について語ってもらった。また、予備調査に基づき、信仰に関わることで、①寮生活での印象的だったエピソード、②派遣先教会での印象的だったエピソード、③授業（毎日の学業面）での印象的なエピソード、④信仰とはどのようなものであるかについて、話してもらった。第2回目からは、そのような枠組みではわかりにくいとの意見があったので、その枠組みでは聞かずに、前回の面接調査以降の印象的だったエピソードについて、自由に語ってもらった。その中でも、特に、第1回目から第2回目までの間、特に夏に行われる教会への長期派遣実習における印象的な事柄について語ってもらった。第3回目は、第2回目から第3回目までの印象的な事柄と、1年間を振り返っての印象的な事柄について語ってもらった。また最終学年生には、卒業を前にした「これからの抱負」も併せて語ってもらった。第4回目以降は、特に筆者から特別の質問をしなくても、自主的に語られるようになった。また、前回の面接のうち、さらに詳細に尋ねる必要があると考えられた内容については次の面接の時に追質問を行った。

(2)分析方法

分析方法は、以下の手順で行った⁴⁾。

①逐語録から「エピソードの分類・見出し・被面接者の語った言葉・エピソードの要約・エピソードに対応する逐語録・そのエピソードの考察・「宗教性」との関連」をエピソードごとに抽出し、個人分析表を作成した（個人分析表の例としてTable 2を参照）。

②個人分析表にしてまとめたエピソードをカードに分

類し、被面接者がどのようにキリスト教に関わり、信仰をもったのかを時系列的に整理し、クリスチャンとしての「宗教性」発達に関する個人史を作成した。個人史を作成するにあたっては、被面接者が書いた信仰体験談も資料として活用し、また、面接調査とは別に、被面接者の個人史の事実確認を行い、主観的な印象や思いも含めて、極力、ありのままの事実や現象に基づいた形での個人史の作成を心掛けた。

③個人史および作道（1983, 1984 a, 1984 b, 1986）による「宗教性」発達モデル（Figure 1）を基に、各事例の「宗教性」発達プロセスを構成した（Figure 2）。

④各事例における「宗教性」発達モデルにおいて共通する局面の分類・整理を行った（Table 3-1, Table 3-2）。

⑤共通する局面の分類・整理を行った後、日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達モデルを構成した（Figure 3）。

結 果

1. 個人史の概要

逐語録および信仰体験談が記載された資料を基に、事例Aから事例Gの個人史を作成した。本論文では、特にクリスチャンとして転機となったエピソード（回心体験など）を中心に個人史の概要を示すこととする。

(1)事例A

①**家族構成** 父、母、弟1人、本人の4人家族であり、本人以外はクリスチャンではない非クリスチャン家庭である。

②**個人史** Aは、1988年にキリスト教系の保育専門学校に入学し、そこでキリスト教と初めて接触した。また、キリスト教学生団体に参加し、クリスチャンの友人と交わる。1990年からキリスト教系の幼稚園に就職するが、職場における人間関係のトラブルにより追い込まれていく。それをきっかけに真剣に教会へ通うようになり、同年に「救いの体験⁵⁾（詩篇55：22）」をし、12月には洗礼を受ける。1994年にキリスト教教育セミナーに出席して、将来、直接伝道者（牧師）になりたいと献身の契機をもつ。1996年に献身の決断し、1997年4月よりZ神学校に入学する。2年次にさらに高次の回心体験を求めて、「きよめの体験⁶⁾（ガラテヤ2：19, 20）」をする。2000年3月にZ神学校を卒業して、4月よりY教会に赴任する。牧師としての生活を通して、自分の置かれた状況、立場が変化しようとも神から救われた喜びも神との関係も変わらないこと、一クリスチャンに過ぎないのであり、それが自分にとって大切であることを示した。日常生活において、信仰的な浮き沈みはあるが、安定した信仰形成をして、Y教会の伝道師として現在に至っている。

(2)事例B

①**家族構成** 父、母、兄1人、姉1人、妹1人、祖母、本人の7人家族であり、母、兄、姉、祖母、本人がクリスチャンのクリスチャン家庭である。

②**個人史** Bは、小学校4年生（1978年）の時に、母に誘われて教会へ行くようになる。教会の雰囲気が入り、それから教会学校へ通うようになる。小学校5年生～6年生（1979～1980年）の時に小学校で仲間はずれに

Table 2 個人分析表の例 (事例Aの第2回面接調査)

カード番号	1	2	3	4	5
見出し	4つのサマーキャンプに参加した事	【神によって捉えられた】ということ	将来の自らの【方向性】について	神の力によって若者の魂が救われ、起こされる(1)	神の力によって若者の魂が救われ、起こされる(2)
エピソードの要約	キャンプの中心は中高生のキャンプであったが初めは①自分に合っていない②中高生の外見を見て退いていたが、彼らが神の力が働き、悔い改めていく姿を見てそれらを反省させられた。また4つのキャンプに行かざるを得ない(行かされた)状況であったが、それらの事件をとおして自分の描いていたビジョンが神によってもっと広げられたものであると認識した。この3年間で最もハードであったが、一番充実した8月であった。	自分が献身する前は子どもを対象とした伝道者として召されていると思っていたし、そこでそれ以上を求められていたら拒否していた。しかし神の計画の中ではそれ以上のものがあった。それは驚きでもあったが、「あら、広がっている(S1)との関連か」といっただけで、その時はもう拒絶する気もなかったし、神のなした業を思う時(人々の考え以上のプログラムを見て)諦めるしかない、神に捉えられたからしようがないと思つた。	卒業生の将来に向けての信仰体験談を聞いて(卒業生は、牧師(ある特定の場所で牧師としての働きをする)として召されているとの確信を持つ)、自分は卒業生のように1つの所に留まるのではなく、広く聖書の言葉を伝える者(伝道者として召されている)と感している。→卒業後、当面は母教会で若者をターゲットに牧師としての活動をしていく。	そのキャンプの講師がスタッフやキャンパーが考えているのは違う、的をはずした説教を語っていた。それはスタッフにとってもキャンパーにとっても不評であったが、彼の説教を通して昨日まで罪をほとんど感じていない子ども達が救われていく姿を見て、これは神の業以外の何者でもないと思わされた。	普段、自分は決して御言葉を賞えるのが得意ではない。しかし子ども達を救いに導こうとしている時はすらすらの的を射た御言葉が出てくる。これは普段の生活をj知っている自分が一番よくわかっている。そのような必要ない時に必要な御言葉が出てくることこそ神の力(聖霊の力)のお陰である。
エピソードに対応する逐語録の位置	S1	S2~S5	S6	S7	S7
「宗教性」との関連	共同体	体験	気づき体験	気づき体験	体験
カード番号	6	7	8	9	
見出し	【人が救われる】ことへの認識	【きよめられる】ということ	レムナントで【自己管理】の大切さを知る	正しい生活の支え	
エピソードの要約	キャンプや聖会などでその場の勢いや雰囲気であつた気がなくなつてしまふ人がいる。実際に今回のキャンプでもそのような子どもがいたがそのようなケースは危険であるとの認識がある。	授業では【きよめ】について聞いたが、初めはよくわかつていなかった。しかし1年生の夏期聖会で原罪の存在を本当に認識した。ガラクヤ2:19, 20の御言葉の内容をつかみ、これ以上は生きていくことはできないと知る。自分の内面にある【悪い思い】を示されもう一度悔い改め。【きよめ】についての理解→悔い改めによつて信仰が広げられる。→「これ以上生きていけない」=信仰=生きていくこと	Z神学校でチャイムを止めた生活をしてみても見えていない所から聖い生活をするこの大変さを知る。	チャイムのない生活を通して思わされたが、人生を歩む・人が生きる道を歩む時にそれが最も正しい人に向けられている【悔い改め→方向転換】ことは大事な事である。誰にも見られないと、全責任を自分で取らなければならない。しかし誰かに見られている事はそこで食い止められ、意識的に罪を犯さずに住むことを意味している。それはすくなく幸せなことであり、これは信仰を持っているからではないか。	
エピソードに対応する逐語録の位置	S7・S8・S9	S10・S11	S12	S13	
「宗教性」との関連	知識	知識・行動・体験	気づき体験	行動・信仰→信じ方はその人の人の選択である	
面接の中で語ってくれた事柄以外で気づいた点	改めて、深い捉え方(洞察)をしている事を感じた。物事を1つ1つ見極めようとする姿勢がうかがえる。				
総括	悔い改めの1つの形を持つている。深い振り返り(反省)がある。言葉の背景(心の有り様)が違う。神との関係における主体性とは何か?。きよめの反省の深まりが現れる。子どもが神を信じることへの判断の適切さを持つている【そのような教義も整理されている】。召命に対する省みも存在している。→信仰(宗教心)が【人格形成】に与える【一事例】プロテスタント信者はある面、個の強さを必要としているために、全員に通用することができないから【普遍化】できない。				

されて、真剣に神を求めるようになる。中学校1年生(1981年)の教会の夏のキャンプで「救いの体験(Iヨハネ1:9)」をする。同年12月に洗礼を受ける。高校生になり、教会学校の教師を始めたり、熱心なクリスチャン生活を送る。その中で、きよめの体験を求め、高校2年生の夏のキャンプにおいて「きよめの体験(ローマ6:11)」をする。その後、短大、幼稚園の教師となり、1996年に献身の決断をし、1997年4月よりZ神学校に入学する。2000年3月にZ神学校を卒業し、結婚とともにX教会の牧師として赴任した。2001年2月に、出産し、一児の母となる。子供との関係を通して、神の愛を改めて教えられ、母親として強くされていく自分を感じる。日々の生活から、これら一つ一つの経験を通して、いろいろな立場、名声などのこの世のもの以上に、「一クリスチャン」としての自分の大切さを感じて、現在に至っている。

(3)事例C

①**家族構成** 父、母、妹2人、本人の5人家族であり、本人以外はクリスチャンではない非クリスチャン家庭である。

②**個人史** Cは、小学校の頃から死への不安をもっていた。特に、大学を卒業した頃に、祖母を癌で亡くしてからその思いは強くなった。それからは心理学や新興宗教、占いと必死に救いを求めていた。大学卒業後、中学校の教師として赴任した。転任した中学校先で、クリスチャンの教師がいて、その教師に教会のカウンセリングの学びに誘われ、教会へ行った(1994年5月)。その教会の集会で読まれた聖書の言葉(マタイ11:28)に心打たれ、それから教会へ通うようになる。1994年8月31日に、自分の罪が示され、悔い改めて、「救いの体験(マタイ11:28)」をする。同年12月25日に洗礼を受ける。1年後(1995年)に、仕事・家族・神との不和を通して、神に立ち返る経験をし、クリスチャンとしての基盤を形成する。Cにとっては、重要な宗教体験となる。1996年秋に、中学校では、キリスト教(福音)を語ることでできない限界を感じ、献身を決意する。1997年4月よりZ神学校に入学する。同年6月に舎監に導かれるままに「きよめの体験(コロサイ3:3)」をする(それまでのCは、「きよめ」を知らなかった。きよめに対する疑問もある)。2000年3月にZ神学校を卒業し、4月よりW教会の牧師として赴任するが、牧師としての教会生活につまづき、今までのクリスチャン生活への省み、牧師としての新たな歩みを模索しながら、現在に至っている。

(4)事例D

①**家族構成** 父、母、妹2人、本人の4人家族であり、家族全てがクリスチャンのクリスチャン家庭(牧師家庭)である。

②**個人史** Dは、牧師家庭に生まれた。そのため物心がついた頃、教会で生活し、聖書の事柄(神の存在、イエス・キリストの救いなど)を当然のように信じていた。そのような環境にいたのもあり、3歳(1976年)の時に、「牧師になりたい」と思うようになった。当たり前のように教会に出席し、いろいろな集会に出席して、救いの体験の決断の時も、妹と競い合っていた。そのようななかで、神を信じていたが、救いの体験の確証の聖書

の言葉がなかったので、小学校4年生(1983年)の8月に、教会の夏のキャンプにおいて「救いの体験(Iヨハネ1:9)」をした。同年9月に洗礼を受けた。ただし、洗礼を受けた時には、まだ自分自身の問題としては受け止めてはいなかった。小学校6年生(1985年)になり、明確な形で牧師になりたいという思いになり、献身することを決意する。高校に入学し(1989年)、新たな友人や価値観を知り、今まで信じていた神やキリスト教に疑問をもち、神から心が離れてしまう。しかし、高校3年生(1991年)の時に両親や教会員の祈りと忍耐によって信仰が回復する。大学に入学し(1992年)、V教会の牧師の祈りを契機に、改めて献身について考える。さらに1996年の集会(聖会)で献身を決断する。しかし確信がなかったので大学卒業後、一旦社会へ出る。社会へ出るが、献身への思いは高まり、1年後、Z神学校へ行くことを決意する。神学校の試験後、自信がなくなり落ち込んでいるなかで、神が自分を導いていると感じ、その時に「きよめの体験(イザヤ6:8)」をする。1998年4月にZ神学校に入学する。2年次に対人関係のトラブルから休学することとなり、U神学校へ行くこととなる。2001年1月にZ神学校に復学し、2001年4月よりT教会の牧師として赴任する。しかし、教会やキリスト教の現実がよくわかるぶん一歩引いた形式的な関わりをしてしまう。

(5)事例E

①**家族構成** 父、母、妹1人、本人の4人家族であり、本人以外はクリスチャンではない非クリスチャン家庭である。

②**個人史** Eは、中学校3年生(1982年)の時のいじめを契機に、人間不信に陥ってしまう。その後は、音楽との出会いによって、音楽だけがEの支えとなっていた。1992年12月に教会のクリスマスコンサートのチラシを拾い、教会音楽に関心をもっていたためにS教会へ通うようになる。S教会で、1人の女性神学生の賛美を通して、キリスト教を真剣に求めるようになる。1993年3月の神学生の最後の奉仕の礼拝で、彼女の賛美を聞き、神の愛を強く感じ、それをきっかけに「救いの体験(Iヨハネ13:4,13)」をする。同年4月11日に洗礼を受ける。1994年8月6日に、車でトラブルを起こし、大けがをして自らの弱さを知り、献身を志す。1996年1月に献身を決断する。1997年4月よりZ神学校に入学する。2年次に対人関係のトラブルから休学するが、神からの召命を再確認し、復学する。3年次にも対人関係において傷つくことがあり、断食祈禱をし、神を求める。その中で、改めて献身を再確認し、併せて「きよめの体験(列王記上4:7, Iテサロニケ5:24)」をする(しかし、H牧師は、この体験を否定的に見て、きよめの体験に対する問題も存在した)。2000年3月にZ神学校を卒業し、同年4月よりR教会の牧師として赴任する。2001年4月、音楽伝道を中心にやっていきたいと思うが、そのことが契機となり、信徒と分裂してしまい、牧師を辞めることになり、クリスチャンとしての自分を模索しながら、現在に至る。

(6)事例F

①**家族構成** 母、妻、子3人、本人の6人家族であり、

家族全てがクリスチャンのクリスチャン家庭である。

②**個人史** Fは、幼少期から高校の間に、次兄からキリスト教の本をもらったり、カトリック教会へ誘われていく。しかし、これらの経験はその後のキリスト教との関わりには直接結びつかなかった。高校卒業後、Q社に入社する（1966年）。その2年後に会社の駅伝大会に出場するが、出場中に意識不明となり、死について真剣に考えるようになる。ちょうどその時に、Iさんに教会に誘われて、教会へ通うようになる。1968年9月17日に、特別集会のなかで、牧師に導かれて「救いの体験（マタイ11：28）」をする。同年10月20日に洗礼を受ける。その1年後に、友人のこと、結婚のことについての祈りが答えられ、改めて、救いの体験の確信をもつ。1969年11月に、会社の転勤話が契機となり、「きよめの体験（マタイ16：15）」をする。その後、3つの教会の開拓伝道に関わり、積極的に奉仕をする。1992年にP教会の開拓伝道が一段落ついた時に、信徒としての使命を終えたと感じ、献身への思いがわいてくる。1996年1月、潰瘍性大腸炎になり、献身のために身辺整理を始める。1999年4月より、Z神学校に入学する。神学生として関わる教会の奉仕を通して、Fは、信仰によって歩み出すことの大切さを理論ではなくて現実のものとして学ぶ。また、自分のいたらなさ、弱さを知る機会にもなり、自分自身の信仰を深めていく。2001年4月、Fは3年生となり、教会の奉仕と神学校の学びを両立しながら、現在に至っている。

(7)事例G

①**家族構成** 父、母、姉1人、本人の4人家族であり、本人以外はクリスチャンではない非クリスチャン家庭である。

②**個人史** Gは、1993年9月に、アメリカへ行く飛行機のなかでキリスト教求道者との出会いにより、その求道者と生活をともにするなかで、教会に通うようになる。1994年10月から1995年3月の間、様々な家で生活するが、ホームステイ先のあるクリスチャン家庭の姿から真剣に教会に通うようになる。1995年3月30日に、牧師の導きを通して、「救いの体験（ヨハネ1：12）」をする。同年4月16日に洗礼を受ける。1995年7月4日に教会の修養会に出席し、圧倒的な神の愛を感じ、献身を決意する。直後、日本に帰国し、O教会のスタッフとして働く。1996年12月～1997年1月にスタッフとのトラブルから深い神の愛を知り、「きよめの体験（IIコリント12：9）」をする。しかし、これがきよめの体験かどうか疑問に残る面も存在する。1997年4月より、Z神学校に入学する。2001年3月までにアメリカのホーリネス系教会の任命と結婚が決定する。また、3月にZ神学校を卒業する。2001年8月よりアメリカのホーリネス系教会に赴任し、現在に至る。

2. モデルの構成

(1)個人史に基づく「宗教性」発達プロセスの構成

まず前述の作道（1983, 1984 a, 1986 b, 1986）の宗教的社会的定義に基づいて「宗教性」発達モデルを構成した。作道（1983, 1984 a, 1984 b, 1986）による「宗教性」発達モデルはFigure 1に示す。

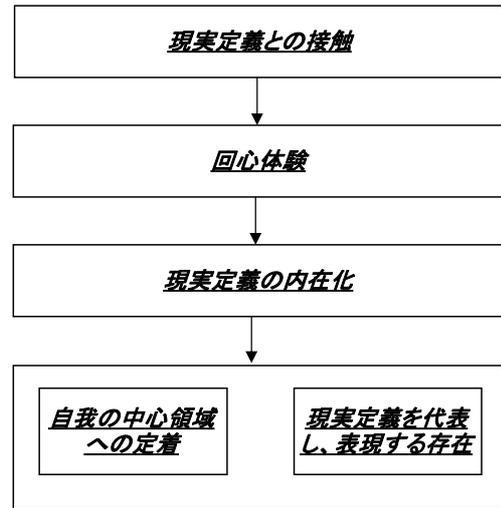


Figure 1 作道（1983, 1984 a, 1984 b, 1986）による「宗教性」発達モデル

続いて、作道（1983, 1984 a, 1984 b, 1986）による「宗教性」発達モデルを基にして、個人史から各事例における「宗教性」発達プロセスを構成した。

まず、キリスト教との出会い（現実定義との接触）をし、回心体験（救い体験）に至る。回心体験（救いの体験）は、その体験によって現実定義の内在化を促し、さらに「宗教性」発達へと結びついていく重要な要因であることを意味する。

次に、回心体験（救いの体験）をし、キリスト教に傾倒していき（現実定義の内在化）、高次の回心体験（きよめの体験）に至る。

最後に、高次の回心体験（きよめの体験）を経て、深いキリスト教理解をし、現実定義が自我の中心領域へ定着し、現実定義を代表し、表現する存在になっていく。さらに、「宗教性」が発達し、「宗教性」に基づく態度・実践を行っていく。

現実定義を代表し、表現する存在となることは、そのプロセスを通じて個人が単にその宗教集団に規定されるだけではなく、一般社会においても宗教集団における自らを規定した存在となることを意味する。個人史に基づき、「宗教性」発達について検討し、個々の「宗教性」発達プロセスを構成した。

日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達モデルを構成するために、7事例全ての「宗教性」発達プロセスを構成したが、本論文では、事例Aにおける「宗教性」発達プロセスのみを紹介することとする（Figure 2を参照⁷⁾）。

(2)日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達モデルの構成

各事例における「宗教性」発達モデルを各局面ごとに分析・整理を行い（Table 3-1およびTable 3-2を参照）、その結果に基づきホーリネス系教会に通う日本人クリスチャンの「宗教性」発達モデルの構成をする⁸⁾。

⑧（高次の回心体験前の）「気づき体験」以降の各局面は、各事例においてばらつきがある。心理学研究者1名と検討を行った結果、事例Aの発達段階が安定した発達をなしているのので、事例Aを基準に整理すると結論

するという事は、それだけキリスト教に傾倒することを示しており、同時に「信念」の深まりも示すものである。

事例C, 事例F, 事例Gについては、その後、高次の回心体験（きよめの体験）に対しての疑問や不安などが生じている。しかし、この3人も高次の回心体験（きよめの体験）をした時点においては、高次の回心体験（きよめの体験）をしたとの確信があるので、その事実に基づいて7人全てが「高次の回心体験（きよめの体験）をした」と位置づけることに問題はないと思われる。

⑩高次の回心体験（きよめの体験）における確証としての聖書（の言葉）

回心体験（救いの体験）と同様に7人の事例全てにおいて、高次の回心体験（きよめの体験）における確証としての聖書（の言葉）が与えられた。

⑪（高次の回心体験後の）「気づき体験」

この局面になると、「気づき体験」により、一層、神を感じたり、さらに神を求めようとする。

⑫深いキリスト教理解

気づき体験の深まりによって、キリスト教理解が深まっていき（「信念」）、それに基づいた実践へとつながっていく（「効果報酬」・「効果責任」）。

⑬-1（現実定義の）自我の中心領域への定着

この局面では、各事例においてばらつきが出てくる。クリスチャンとしての自分をそれだけ受け入れているか、また、対峙しているかという面が重要な要因となる（「信念」）。

この段階を経ている3人の事例を見ると、成熟していくプロセスで、自分だけではなく周囲への配慮やクリスチャンとしての深い関わり方ができるようになっている（「共同体」の深まり）。

⑬-2 現実定義を代表し、表現する存在になる

この局面では、各事例は、神学生の立場であったり、牧師としての立場であったりと立場は異なるが、ともに目に見える形でクリスチャンとしての実践をする。この局面では、「行動」が活性化されていく。

⑭（⑬局面後の）「気づき体験」

この局面から、事例A, 事例B, 事例Fの事例で位置づけていく。この局面になると、今までの様々な出来事一つ一つを神の業として気づき、神の業として捉えていくようになる。

⑮「宗教性」の深まりと「宗教性」に基づく態度・実践

最後の局面では、「信念」、「行動」が深まり、クリスチャンとしての新たな展望が生じる。また、「自分は一人のクリスチャンに過ぎない」と自分の存在を謙虚に受け止めるようになる。

以上の整理の共通する部分を基に構成したのがFigure 3に示したモデルである。このモデルが、本研究から導き出された『日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達モデル』として位置づけられるものである。

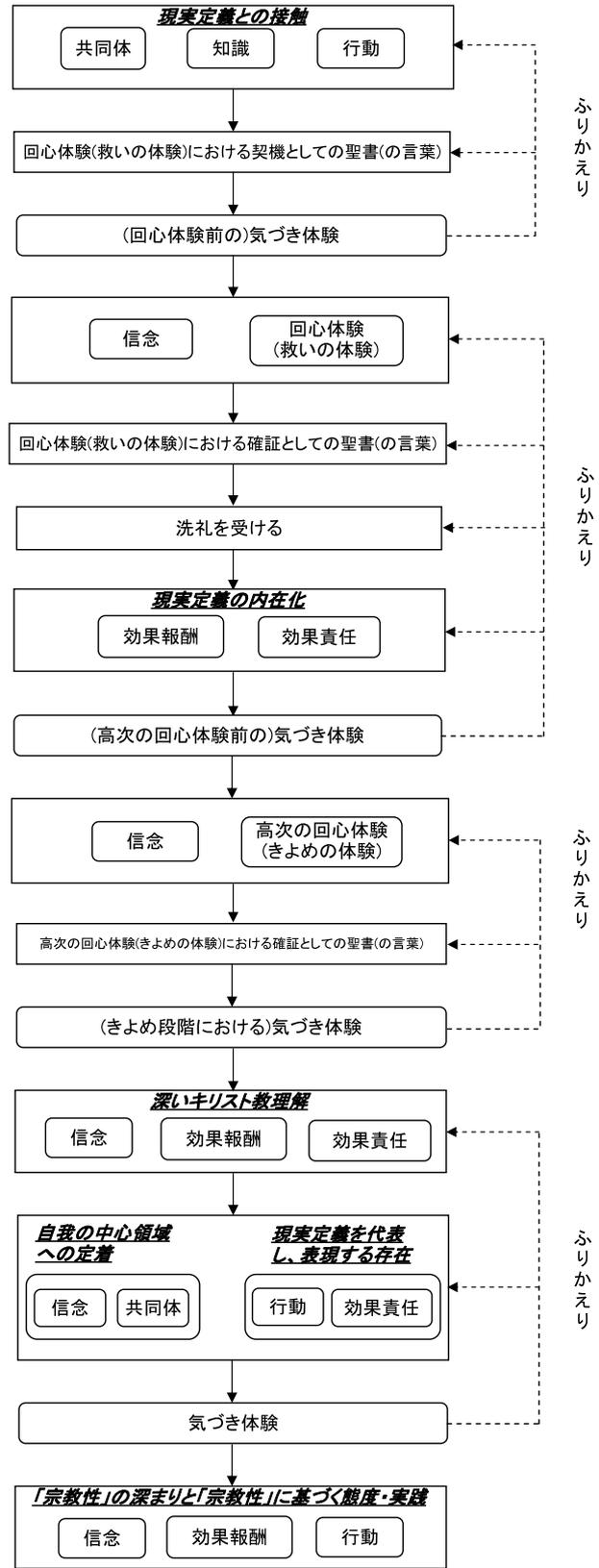


Figure 3 日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達モデル

考 察

本研究では、質的調査法の一つであるライフヒストリー法を用いて、ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達モデルを構成した。ま

Table 3-1 全事例における『①現実定義との接触～⑧(高次の回心体験前の)「気づき体験」』までの各局面のエピソード

①現実定義との接触		
キリスト教および教会との関わりは、「現実定義との接触」から始まるが、まず(i)「共同体」の形成、(ii)「知識」の吸収、(iii)「行動」から始まる場合が多い。以下は、各事例の具体的なエピソードである。このエピソードにより、現実定義との接触は、「共同体」、「知識」、「行動」が重要な要因であることが示唆される。		
(i)「共同体」の形成	(ii)「知識」の吸収	(iii)「行動」の開始
A:キリスト教学生団体での友人との交わり B:母に誘われて、教会へ行くようになる C:転任先のクリスチャン教師との出会い D:物心がついた時には、教会で生活する E:女性神学生との出会い F:駅伝大会後、1さんに誘われて教会へ行く G:飛行機の中でキリスト教求道者との出会い	A:集会での説教や聖書通読などによる B:教会の話や賛美に関心を持つ C:教会のカウンセリングの学び(集会)へ行く D:物心がついた時には、教会で生活する E:教会音楽に関心を持つ F:教会の話に関心を持つようになる(マタイ7:7) G:アメリカの教会へ通い、聖書の話聞く	A:教会出席、聖書通読 B:教会出席、聖書通読 C:教会のカウンセリングの学び(集会)へ行く D:物心がついた時には、教会で生活する E:教会のクリスマスコンサートのチラシを拾う F:毎週、教会へ通うようになる G:毎週、教会へ通うようになる
②回心体験(救いの体験)における契機としての聖書の言葉		
Dについては、幼少期であったことが契機となった。Gについては、「共同体」からの契機であった。しかし、5事例で回心体験(救いの体験)における契機としての聖書の言葉が存在しているため共通部分として採用する。		
A:伝道の書12:1、詩篇55:22 B:ルカ23:34 C:マタイ11:28	E: I コリント13:4,13 F: マタイ6:34	
③(回心体験前の)「気づき体験」		
A:職場での人間関係を通して、神の存在を感じ、神を求め、真剣に教会へ通おうとする。教会の友人との交わりをしたい。 B:家族が信じているだけの神でなく、自分の神であると感じる。教会学校が自分にとっての安らぎや力を与えてくれる C:聖書の言葉により、教会に通うようになる D:神を求めたい思いはあるが、はっきりした「気づき体験」は乏しい。いろいろな集会に出席して、救いの体験の決断の時も妹と競い合っている E:神学生の賛美が心に響いて、涙が止まらない。神学生の賛美が心に響いてくる(神に心が向いている) F:聖書はすばらしい書物だと感じる。仕事が進み始めて、真剣に神を求めようになる G:クリスチャン家庭との生活の中で、神の存在を模索する。クリスチャン家庭の姿から、神、キリスト教への志向が強まっていく		
④回心体験(救いの体験)・「信念」		
「気づき体験」が深まり、7人の事例全てが回心体験(救いの体験)をしている。そして、回心体験(救いの体験)をするということは、それだけキリスト教に傾倒するわけだから信念の深まりが存在する。		
⑤回心体験(救いの体験)における確証としての聖書の言葉		
7人の事例全てで回心体験(救いの体験)における確証の根拠としての聖書の言葉が与えられた。また、回心体験(救いの体験)における契機としての聖書の言葉が、確証の言葉になっている場合も多い。		
A:伝道の書12:1、詩篇55:22 B: I ヨハネ1:9 C: マタイ11:28 D: I ヨハネ1:9	E: I コリント13:4,13 F: マタイ11:28 G: ヨハネ1:12	
⑥洗礼を受ける		
7人の事例全てが洗礼を受け、早い事例では、回心体験(救いの体験)をしてから1ヶ月で、洗礼を受けている。		
⑦現実定義の内化		
現実定義の内化は、クリスチャンとなり、「宗教性」の効果(「効果報酬」・「効果責任」)が現れたり、クリスチャンとなって今までの歩みとは異なる転機となる時期だと考えられる。		
A:幼稚園を辞め、Z神学校へ入学する B:教会学校の教師を行うなど、熱心に教会へ通う C:仕事・家族・神との不和を通して、神に立ち返る体験をする(クリスチャンとしての基盤の形成) D:小6の時に、献身することを決意する E:教会学校の教師や礼拝の楽器演奏をするなど熱心に教会の奉仕を行う F:教会学校の教師、青年会の会長をやるなど熱心に教会の奉仕を行う G:熱心にキリスト教の知識を吸収する		
⑧(高次の回心体験前の)「気づき体験」		
この局面になると、「気づき体験」が強くなり、一層、神を感じたり、さらに神を求めようとする。そのために、EやF、Gのような明確な体験を持つ者もいる。		
A:神学校生活の中で出来事を神の業・計画として捉えていく。教会の青年会のメンバーとの交わりからクリスチャンとしての自由に気づく。 B:教会学校の教師の奉仕をして、教会の大切さを感じる。高1の時に、きよめの体験をしたと思ったが、不徹底であり、自分の罪深さを感じる。 C:神学校生活の中で、自分の信仰について吟味し、考える機会がある D:平穏な教会生活を送り、クリスチャンとしての歩みをする。牧師との祈りの中で、改めて献身を考える契機を持つ。 E:自分の弱さを強く感じ、神の前に自らが砕かれる経験をする。高熱の中、自分が神に生かされていることを強く感じる。休学の中で、神からの召命を確認する。また、後の礼拝説教の中でも、神からの召命を再確認する。 F:祈りが答えられ、改めて、救いの体験の確信を持つ G:修養会の集会の説教を通して、圧倒的な神の愛を感じる。周囲のクリスチャンの姿から神の愛を感じる。		

Table 3-2 全事例における『⑨高次の回心体験(きよめの体験)・「信念」～⑮「宗教性」の深まりと「宗教性」に基づく態度・実践』までの各局面のエピソード

<p>⑨高次の回心体験(きよめの体験)・「信念」</p> <p>7人の事例全てが高次の回心体験(きよめの体験)をしている。そして、高次の回心体験(きよめの体験)をするということは、それだけキリスト教に傾倒するわけだから「信念」の深まりが存在する。C、F、Gについてはその後、高次の回心体験(きよめの体験)に対しての疑問や不安などが生じている。しかし、この3人も高次の回心体験(きよめの体験)をした時点においては、高次の回心体験(きよめの体験)をしたとの確信があるので、その事実に基づいて7人全てが「きよめの体験をした」と位置づけることに問題はないと思われる。</p>
<p>⑩高次の回心体験(きよめの体験)における確証としての聖書の言葉</p> <p>救いの体験と同様に7人の事例全てが高次の回心体験(きよめの体験)における確証の根拠としての聖書の言葉が与えられた。</p> <p>A: ガラテヤ2:19,20 E: 列王記上4:7、Iテサロニケ5:24 B: ローマ6:11、ガラテヤ2:19,20 F: マタイ16:15 C: コロサイ3:3 G: IIコリント12:9 D: イザヤ6:8</p>
<p>⑪(高次の回心体験後の)「気づき体験」</p> <p>この局面になると、「気づき体験」が深まり、一層、神を感じたり、さらに神を求めようとする。</p> <p>A: 卒業生の抱負を通して自分の将来像を神の業として気づく。 B: 幼稚園教師時代において神中心の生活をしている。その中で、新たに献身の思いが湧いてくる。さらに、聖会で献身を神から迫られる。 C: 神学校に入学し、神学校に合わず、葛藤の中で、神を追い求める。 D: 神学校に入学し、神やキリストに関連させて考えるが、現実的な考え方となり、形式的な関わり方として捉えてしまう傾向がある。 E: 対人関係のトラブルによって、神に変えられていきたいと感じる。 F: 具体的な行動を通して、クリスチャンとして安定した深まりを示す。 G: 神学校に入学し、新たな神学を学んだり、寮生活を通して様々な事柄を考える機会を与えられ、神やキリスト教についての思いを巡らす。</p>
<p>⑫深いキリスト教理解</p> <p>「気づき体験」の深まりによって、キリスト教理解が深まっていき(「信念」)、それに基づいた実践へとつながっていく(「効果報酬」・「効果責任」)。</p> <p>A: 将来像が明確になるなど、自分の体験を深く理解し、自分の生き方へと結びつけるようになる。 B: 神学校へ入学し、今までのクリスチャン生活とは異なる学びや生活を送り、深いキリスト教理解へとつながっていく。 C: Z神学校へ導かれたことを、卒業前の1つ1つの経験から神の導きと理解する。Z神学校で受けたものを、牧師になってから、一度拭い去って、整理したいと感じる。 D: 対人関係によるトラブルにより、休学となり、今までとは異なる捉え方や自らと向き合おうとする傾向が現れる。また、新たな神学校で新たな学びをして自我関与が高まる。 E: 卒業論文で「黒人神学」について学び、自分なりのキリスト教理解を深める。また、神学校で、多くの経験を通して、牧師としての核、基本を学ぶ。 F: 2つの教会の開拓伝道に主体的に関わる。主体的なクリスチャンとして率先して行動する。 G: 結婚の決定やアメリカでの牧師としての任命が決定し、今まで以上に、クリスチャンとしての生き方について考えさせられ、神と向かい合う機会が増す。今までの経験、知識が整理されていく。また、多くの聖書の言葉により、神に立ち返る機会を得る。</p>
<p>⑬-1(現実定義の)自我の中心領域への定着</p> <p>この局面では、各事例においてばらつきが出てくる。クリスチャンとしての自分をそれだけ受け入れているか、また、対峙しているかという面が重要な要因となる(「信念」)。特に、この段階を経ているA、B、Fの事例をみると、「宗教性」が成熟していく過程で、自分だけではなく周囲への配慮やクリスチャンとしての深い関わり方ができるようになっている(「共同体」の深化)。</p> <p>A: 舎監との関係から、キリスト教的な「従う」を学び、対人関係の見方が変化し、深まっていく。 B: 神学校での寮生活を通しての孤独感から神との関係が深まる。友人の事故から祈りの姿勢が変化する。 C: 牧師としての教会生活でのつまずき。今まで歩んできたクリスチャン生活への省み→クリスチャンとしての再形成がこれからの課題となる。 D: 一步引いた、形式的な関わりになっている。しかし、休学からの一連の出来事を通して、主体的に受け止める方向へ進みつつある。 E: 赴任した教会の教会員と分裂してしまい、牧師を辞めることになり、クリスチャンとしての自分が見えなくなってしまう。 F: 献身に向けての準備。神学生として派遣された教会の信徒と接することによって、あらためて自分のいたらなさを知り、自分自身を深めていく。 G: 牧師としてやっていくことへの不安を持っている。今までの自らの信仰を再確認する必要がある。</p>
<p>⑬-2現実定義を代表し、表現する存在になる</p> <p>この局面では、各事例は、神学生の立場であったり、牧師としての立場であったりと立場は異なるが、共に目に見える形でクリスチャンとしての実践をする。この局面では、特に、「行動」が活性化されていく。</p> <p>A: カウンセラーとしてサマーキャンプに参加し、キャンパーに対して個人伝道を行ったりして主体的な関わりを持つ。 B: 教会の奉仕や自治会のリーダーとして主体的な活動をする。 C: 教会の牧師として赴任して、その責務を全うしようと決意する。 D: 教会の牧師として赴任する。立場としての牧師を重視。 E: 教会の牧師として赴任する。音楽伝道への思いはあるが、牧師としての責務を全うしようとする。 F: 教会の開拓伝道を手伝う神学生と積極的に伝道に関わっていく。Z神学校の様々な責務を負う。伝道チームとして、多くの奉仕を主体的に行う。また、新たに派遣された教会で、牧師と同様の奉仕を行う。 G: アメリカの教会の牧師として赴任して、その責務を全うしようと決意する。</p>
<p>⑭(⑬局面後の)「気づき体験」</p> <p>この局面から、A、B、Fの事例で位置づけていく。この局面になると、今までの様々な出来事の一つ一つを神の業とする気づきを深めていく</p>
<p>⑮「宗教性」の深まりと「宗教性」に基づく態度・実践</p> <p>最後の局面では、「信念」、「行動」が深まり、クリスチャンとしての新たな展望(効果報酬)が生じる。</p> <p>A: 進路が決定し、神学生として総括の時を持つ。「ありのままがいい」との自己受容の深まりをみせる。最期まで責任を持って信徒と接していく心構えを持つ。具体的な牧師としての動機が始まる。生活の中で浮き沈みはあるが、神との関係は安定したものである。自らを「一クリスチャン」として捉えている。 B: 進路が決定し、2000年4月から牧師として赴任する。結婚、出産を通して、信仰が安定する。以前持っていたクリスチャンとしての義務感から解放される。「生活」を積み重ねていく中で、「宗教性」が深化していく。様々な経験から、自分は「一クリスチャン」に過ぎないと感じるようになる。 F: 牧師としての自分を明確に位置づけていく。周囲との関係を通して、さらに謙虚さを学んでいく。自分の立場が明確になったり、謙虚さを学ぶことによって、クリスチャンとしての「行動」がさらに活性化されていく</p>

た、この「宗教性」発達モデルは、作道（1983, 1984 a, 1984 b, 1986）の宗教的社会化およびGlock(1962), Verbit (1970) の「宗教性」の観点から展開したものであり、それらの観定の範囲内で構成され、明らかにされたものである。

モデル構成にあたっては、まず面接調査から、7人のZ神学校の神学生の「自らの信仰に関わるエピソード」を聴取した。その面接調査で得られた口述資料と彼らの信仰体験談（文献資料）を活用して、「宗教性」の下位概念との関連から各エピソードを分類した。それを基に7事例の個人史を作成し、個人史からそれぞれの「宗教性」発達プロセスを構成した。7事例の「宗教性」発達プロセスから各局面ごとに共通項を集約し、最終的にホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達モデルを構成した。

上記の手順で「宗教性」発達モデルを構成したが、この「宗教性」発達モデルはどの程度、モデルとしての信頼性および妥当性を有しているのだろうか。質的研究における信頼性、妥当性は、数量的研究で説明される信頼性、妥当性の基準とは必ずしも一致しないことが示唆されている（渡邊, 2004; 桜井, 2005）。

モデル自体の妥当性、信頼性を検討する前に、まずサンプリング（対象者選択）の問題について検討する。サンプリングの問題は、モデルの妥当性、信頼性に関わる重要な問題である。サンプリングには、数量的な研究で行われる確率的サンプリングと質的研究で行われる合目的サンプリングに大別される。質的研究では、確率的サンプリングのように一般化のために必要なサンプル数を算出することはできない。そのため、どのような基準で対象者が選ばれており、それらを調べることが調査目的に照らしてどのように合目的といえるかについて明確に示される必要がある（Merriam, 1998; 澤田・南, 2001）。選択基準を明示することにより、質的研究のサンプリングに対する批判への一つの回答となるわけである。

本章の目的は、ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達モデルを構成することである。モデル構成にあたっては、ホーリネス系教会に関わる様々なタイプの日本人を抽出することにより、できる限り適用範囲の広い「宗教性」発達モデルを構成したいと考えていた。この考えは、合目的サンプリングで示されているサンプリングの一つである「最大の多様性をもったサンプリング（Merriam, 1998）」に沿ったものであった。「最大の多様性をもったサンプリング」は、より多様性をもった少数のサンプルからの調査結果こそが、諸ケース間の重要な共有パターンを産み出すと示されている。本研究においても、より多様性をもった少数のサンプルから、対象者間の重要な共通項を抽出し、そこからモデルを構成しようと考えたわけである。まず神学生を対象としたのは、「宗教性」発達モデルを構成するためには、ある程度高いキリスト教への傾倒を維持していないと「高次の回心体験」への過程も含め、モデルの適用範囲が狭まると考えたからである。また、筆者自身がZ神学校に通っていたことから、神学生は様々な背景から神学校に入学している場合が多く、「宗教性」の様相の呈し方に多様性がみられると予測できたからであ

る。そのため、(1)クリスチャン家庭の出身であるか、非クリスチャン家庭の出身であるか、(2)クリスチャン家庭のなかでも、牧師家庭の出身であるか、信徒家庭の出身であるか、(3)当初からホーリネス系教会の出身であるか、他の教会出身で後にホーリネス系教会に関わるようになったか、(4)学歴は、高校卒業であるか、大学卒業であるか。さらに社会人を経て神学校に入学しているのか、(5)面接調査時の年齢が、青年期に相当しているのか、成人期に相当しているのか、といった様々な選定基準を設定した。

しかし、方法の「調査対象者」でも示したが、男性については上記の選定基準から4名の男性を選定することができたが、女性に関しては、神学校という性格上、選定基準以前に、調査実施自体に制約があり、上記の選定基準で選定することはできなかった。そのため、本研究で合目的サンプリングが完全に達成できたとはいえず、サンプリングに関しては、要件を満たすことができなかった。ただし、実際の面接調査を通して、女性の対象者についても、男性とは異なる特性を多く持ち合わせていることが明らかになっていった。今回、対象者となった7人の事例から多様な傾向を聴取でき、調査目的に沿ったサンプリングがある程度できたと思われる。

続いて、モデルの信頼性について検討する。心理学的測定における信頼性とは、同じ対象に対して同じ測定を繰り返した時に、同一または近似した測定値が繰り返し得られることを指している。しかし質的研究では、たとえば縦断的な面接調査を行った場合、面接者と被面接者が同一人物であっても、前回と完全に同じ方法で語りを聞いたり、記録することはできないため、全く同じインタビューをすることはありえない（渡邊, 2004; 桜井, 2005⁹⁾）。さらに、その対象者の変化や差異自体も質的研究の重要な対象となるとも指摘している（渡邊, 2004; 桜井, 2005）。そのため、心理学的測定から示される信頼性の概念はあまり意味をもたないとしている。質的研究ではむしろ研究方法の透明化（確実性・正当性）をはかることによって信頼性を示すことができるとしている（渡邊, 2004; 桜井, 2005; 川又・寺田・武井, 2006）。研究方法の透明化とは、研究結果の報告において、データの収集方法や分析方法、解釈の基準など枠組みをできるだけ具体的に論述し、明らかにすることである。それぞれの研究者が行った研究方法の違いや特質を読み手に明示することにより、その研究方法が信頼に値するか否かを示すことができるとしている（渡邊, 2004; 桜井, 2005; 川又・寺田・武井, 2006）。

本研究のモデル構成においても、できる限りこの透明化を心掛けた。方法の記述では、質問内容、分析方法について詳細に説明した。特に、分析方法では、個人分析表の例を挙げ、分析過程を明示するように心掛けた。さらに結果の記述においても、まず個人史の概要を示し、事例Aにおける「宗教性」発達プロセスを示すことによって、個人レベルでの分析過程を示した。その上で、各局面ごとのエピソードの分類をプロセスに従って示し、なぜ最終的に日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達モデルがこのように構成されたのかの手続きを明確に示した。以上の透明化の作業により、本研究で構成した

「宗教性」発達モデルの信頼性を示すことができたと思われる。

最後に、モデルの妥当性について検討する。心理学的測定における妥当性とは、測定結果が測定対象のリアリティを正しく反映していることを指している。質的研究における妥当性の基準も信頼性と同様に数量的研究で説明される基準と異なることが指摘されている（渡邊，2004；桜井，2005）。しかし信頼性の説明では引用した研究者の論点が重なっている場合が多かったが、妥当性では異なる見解が示されている。渡邊（2004）は、基準関連妥当性を例に挙げ、妥当性の検討の際には、外的基準となる客観的な真値があることが前提であるが、質的研究ではそうした客観性は前提とされず、むしろ非客観性がかえって観察や解釈に豊かさを与えるとしている。その上で、質的研究の妥当性とは、研究結果が公表されて研究者間で共有されていくなかで妥当性が確認されていく「妥当化の過程」として捉えるべきだろうと述べている。川又・寺田・武井（2006）は、「行為者の語りから人々の主観的現実接近し、そこから分析上のカテゴリーを引き出すライフヒストリー法は、信仰というきわめて主観的な意味の領域を扱う上で、優れて妥当性の高い方法だといえる」と説明し、宗教および信仰という主観的な意味の領域をライフヒストリー法で扱うこと自体が測定対象のリアリティ＝信者の主観的なリアリティを正しく反映しているとしている。桜井（2005）は、ライフストーリー研究が、価値観や動機によって意味構成された主観的リアリティを研究目的にしている限り、唯一の「真実」の語りを探求するのではなく、ライフストーリーの「信憑性」が求められ、その信憑性が保たれることが妥当性の基準となると示唆している。そしてこの信憑性の指標になるのが「内的一貫性」であるとしている。これはある時点で語られたことが別の時点で矛盾していないかを検討するものである。これは矛盾を排除するというのではなく、その矛盾がどうして起きたのか、その整合性を検討することによって確かなものになっていくと説明している。しかし、研究分野の違いもあるが、内的一貫性は、妥当性というよりも信頼性に位置すると考えられる。

以上のように妥当性については、三者の見解が異なっていることがわかる。渡邊（2004）の見解に立てば、本研究の「宗教性」発達モデルは、「宗教的発達研究に新たな知見を提供し、日本の宗教心理学の発展に寄与するものである（杉山，2001，2004）」との示唆もあることから、このモデルには妥当性があると示すことができる。また、川又・寺田・武井（2006）の見解に立つと、本研究も宗教を対象としたライフヒストリー法を扱っているわけだからその時点で高い妥当性を有していることになる。桜井（2005）の見解についても、本研究は縦断的に面接調査を行っているため、語りの矛盾やズレについての整合性を適宜確認することができ、その妥当性を高めていったと考えられる。しかし、この三者の見解をみても、質的研究の妥当性について明確な見解を提示しているとは言い難い。質的研究の妥当性についてはさらなる議論が必要であると思われる。

本研究では、これら3つの観点からの妥当性を確認す

ることはできた。これ以外にも、モデルの構成では、面接調査から得たデータに加え、本人の信仰体験談を援用するなどして、できる限り複数のデータから作成するように心掛けたり、事例の7人に対して、直接、個人史に誤りがないかの事実確認をしたり、関連領域の複数の研究者にそれぞれ構成したモデルを検討してもらい、その妥当性を高めることに努めた。

西脇（2005）は、日本における心理学的な宗教性発達研究は、理論、実証、議論のどれをとってもこれからの段階であると論じているが、本研究で示された結果から、日本人の宗教性発達について議論するきっかけを作ることができたのではないと思われる。先に、「まず1つの教団、教派の「宗教性」発達を明らかにすることができれば、……日本人の宗教性発達を検討するための礎を作ることができる。」と述べたが、その第一歩を踏み出すことができたのではないだろうか。

ただし、この「宗教性」発達モデルは、作道（1983，1984 a，1984 b，1986）の宗教的社会化およびGlock（1962），Verbit（1970）の「宗教性」の観点から構成したものであり、それらの観点から検討したものである。そのため、本研究で明らかにされたのは、上記の観点に基づくホーリネス系教会に関わる日本人の「宗教性」発達に限定される。今回の研究で明らかにされた知見を活用して、今後、他の教派、宗派にも研究を展開していきたいと考えている。

引用文献

- Berger, P.L. & Luckmann, T. (1977). 日常世界の構成：アイデンティティと社会の弁証法（山口節郎，訳）. 東京：新曜社. (Berger, P.L. & Luckmann, T. (1967). *The social construction of reality: A treatise in the sociology of knowledge*. Garden City, NY: Doubleday.)
- Cornwall, M., Albrecht, S.L., Cunningham, P.H., & Pitcher, B.L. (1986). The dimensions of religiosity: A conceptual model with an empirical test. *Review of Religious Research*, 27, 226-244.
- Glock, C.Y. (1962). On the study of religious commitment. *Religious Education Research Supplement*, 57, 98-110.
- Glock, C.Y., & Stark, R. (1965). *Religion and society in tension*. Rand McNally & Company.
- Glock, C.Y., & Stark, R. (1966). *Christian beliefs and anti-Semitism*. New York: Harper & Row.
- Hill, P.C., & Hood, R.W.Jr. (1999). *Measures of religiosity*. Birmingham, AL: Religious Education Press.
- 今田 恵. (1955). 宗教意識の発達. 牛島義夫・桂 広介・依田 新 (編), *青年心理学講座：1巻 文化と人生観* (pp. 99-145). 東京：金子書房
- 井上順孝. (1999). *若者と現代宗教：失われた座標軸*. 東京：筑摩書房
- 神保信一. (1980). 宗教性の発達. 澤田慶輔・神保信一 (編), *サイエンスライブラリ心理学：3 青年心理学* (pp. 94-105). 東京：サイエンス社

- 金児曉嗣. (1997). 日本人の宗教性: オカゲとタタリの社会心理学. 東京: 新曜社
- 川又俊則. (2002). ライフヒストリー研究の基礎: 個人の「語り」にみる現代日本のキリスト教. 東京: 創風社
- 川又俊則. (2005). ライフヒストリー・アプローチと宗教研究 (テーマセッション5 社会調査と宗教研究: 現代日本人の宗教意識の測定). *宗教と社会*, 11, 258-262
- 川又俊則・寺田喜朗・武井順介. (2006). ライフヒストリー・アプローチと宗教社会学. 川又俊則・寺田喜朗・武井順介(編), *ライフヒストリーの宗教社会学: 紡がれる信仰と人生* (pp. 5-24). 東京: ハーベスト社
- 松島公望 (2006). キリスト教における「宗教性」の発達および援助行動との関連: キリスト教主義学校生徒を中心にして. *発達心理学研究*, 17, 282-292
- 松島公望 (2007). プロテスタント・キリスト教に関わる日本人の宗教性発達に関する心理学的研究—ホーリネス系教会およびキリスト教主義学校を対象として—. 東京学芸大学博士論文
- Merriam, S. B. (2004). 質的調査法入門: 教育における調査法とケース・スタディ (堀 薫夫・久保真人・成島美弥, 訳). 叢書現代社会のフロンティア3. 東京: ミネルヴァ書房. (Merriam, S. B. (1998). *Qualitative research and case study application in education*. Jossey-Bass.)
- 難波淳子. (2000). 中年期の日本人女性の自己の発達に関する一考察: 語られたライフヒストリーの分析から. *社会学心理学研究*, 15, 164-177
- 西脇 良. (2005). 宗教性発達研究の研究動向. 浦上昌則・神谷俊次・中村和彦 (編), *心理学: Introduction to Psychology* (pp. 122-123). 京都: ナカニシヤ出版
- 西山 茂. (1976). 宗教的信念体系の受容とその影響: 山形県湯野浜地区妙智会員の事例. *社会科学論集* (東京教育大学文学部紀要) 第23号, 東京教育大学, 東京, 1-73
- 作道信介. (1983). 入信過程に影響を及ぼす心理学的諸要因の検討. *日本心理学会第47回大会発表論文集*, 782
- 作道信介. (1984 a). 入信以後の宗教的社会化の過程: M県S教会の専従者の場合. *日本心理学会第48回大会発表論文集*, 677
- 作道信介. (1984 b). 宗教集団の発展段階と入信過程: 宮城県S教会を対象として. *日本文化研究所研究報告別巻第21集*, 東北大学, 宮城, 31-59
- 作道信介. (1986). 羊と羊飼: S教会におけるアイデンティティの確立. *日本文化研究所研究報告別巻第23集*, 東北大学, 宮城, 1-36
- 桜井 厚. (2002). インタビューの社会学: ライフストーリーの聞き方. 東京: せりか書房
- 桜井 厚. (2005). ライフストーリー・インタビューをはじめ. 桜井 厚・小林多寿子(編), *ライフストーリー・インタビュー: 質的研究入門* (pp. 11-52). 東京: せりか書房
- 澤田英三・南 博文. (2001). 質的調査: 観察・面接・フィールドワーク. 南風原朝和・市川伸一・下山晴彦 (編), *心理学研究法入門: 調査・実験から実践まで* (pp. 19-62). 東京: 東京大学出版会
- 瀬島克之・杉澤廉晴・大滝純司・前沢政次. (2001). 質的研究の背景と課題: 研究手法としての妥当性をめぐって. *日本公衆衛生雑誌*, 48(5), 339-343
- Spilka, B., Hood, R.W.Jr., Hunsberger, B., & Gorsuch, R. L. (2003). *The psychology of religion: An empirical approach* (3rd ed.). New York: Guilford Press.
- 杉山幸子. (2001). 日本における宗教心理学の歴史と現状. *心理学評論*, 44(3), 307-327
- 杉山幸子. (2004). *新宗教とアンデンティティ: 回心と癒しの宗教社会心理学*. 東京: 新曜社
- 谷 富夫. (1996). ライフ・ヒストリーとは何か. 谷 富夫 (編), *ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために* (pp. 3-28). 京都: 世界思想社
- Verbit, M.F. (1970). The components and dimensions of religious behavior: Toward a reconceptualization of religiosity. In P.E. Hammomd, & B. Johnson (Eds.), *American mosaic* (pp. 24-39). New York: Random House.
- 渡邊芳之. (2004). 質的研究における信頼性・妥当性のあり方: リアリティに至る過程. 無藤 隆・やまだようこ・南 博文・麻生 武・サトウタツヤ (編), *質的心理学: 創造的に活用するコツ* (pp. 59-64). 東京: 新曜社
- 山田洋子. (1986). モデル構成をめざす現場心理学の方法論. *愛知淑徳短期大学研究紀要第25号*, 愛知淑徳短期大学, 愛知, 31-51

注

- 1) 日本では、カトリックとプロテスタントの区別さえ一般にほとんど注意が払われていないが、キリスト教といえば通常プロテスタントを指し、カトリックはカトリックと別個に呼ばれる (井上, 1999)。
- 2) その中間には、文献資料をインタビューで補う、あるいはインタビューを文献資料で補うという相補的アプローチが存在するとし、ライフヒストリー研究者は、研究対象に応じて最も適切なアプローチを選択している (川又・寺田・武井, 2006)。
- 3) 実際、宗教研究 (特に、宗教社会学) において、ライフヒストリー法は、個人の信念体系受容プロセスの分析に用いられ、多くの成果が上げられてきた (川又, 2005)。
- 4) この分析方法は、Merriam (2004) が示した質的調査法の分類では、「基本的または一般的な質的調査法」に相当する。「基本的または一般的な質的調査法」の特性としては、①記述・解釈・理解を含む、②よく起こるパターンをテーマやカテゴリーとする、③プロセスの記述、を挙げている。
- 5) 救いの体験とは、キリスト教において、自らの罪を悔い改め、イエス・キリストを救い主として信じ、自分の罪が赦されることをいう。本研究は、心理学的研究であるため、教会用語である救いの体験という用語

は原則としては使わずに（個人史では、本人の言葉であるためそのまま使用する）、「救いの体験」を「回心体験」と呼ぶことにする。

- 6) きよめ（聖化；Sanctification）の体験とは、「神より救いを受けた者でも、人間のなかに深く食い込んでいる罪の性質（これを原罪という）までは、救いの体験ではまだ処置されていない」とのホーリネス系教会の教えに基づき、神の恵みが、原罪の性質にまでおよび、故意に罪を犯すことがなくなり、自己中心的な生き方から神中心の生き方へと変化する体験をいう。このことによってクリスチャンとしての本格的な成長がなされるとの見解をホーリネス系教会はとっている。そのため、きよめの体験は重視されており、きよめの体験を得るための集会（聖会）なども催されている。本研究は、心理学的研究であるため、教会用語であるきよめの体験という用語は原則としては使わずに（個人史では、本人の言葉であるためそのまま使用する）、「きよめの体験」を「高次の回心体験」と呼ぶことに

する。

- 7) 「体験」の概念には、「回心体験」および「神や日常生活のなかで、神、神の愛、また、神に関連する事柄をどのように考え、感じているかの体験」の両方の意味が含まれている。「回心体験」との相違を明確にするために、後者の「体験」を「気づき体験」とした。
- 8) 「献身」は、神からの召命を受け、牧師（直接伝道者）として働くことを指している。そのため、全てのクリスチャンに関わる経験ではないため、モデルの構成からは外すこととする。
- 9) 桜井（2005）は、ライフストーリー研究から信頼性、妥当性について説明しているが、ライフストーリー研究は近接領域であることから、併せて引用した。ライフストーリーとは、個人が語るストーリーであり、インタビューの現場で得られる語り手の語りで、ライフヒストリーとは、それを編集し読み手へ提出する状態のものとして説明されている（桜井，2002）。